

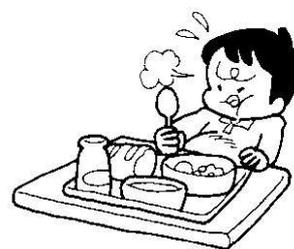
悲しい昔話②

小学5年生から学校給食というものが始まりました。つまり、それまでは(高学年の)子どもたちは弁当を持って学校へ行きました。もちろん中学生もです。記憶があいまいですが、確か家が学校の近くにある子は食べに帰ることも許されていたような気がします。

ところで、私は給食が大好きでした。何しろすべての献立が家で食べたことのないおしゃれなものだったからです。毎日田んぼや畑の仕事に朝から晩まで働く母親にはゆっくり食事の準備などする時間が与えられていませんでしたから。(父親は単身赴任と入院生活が半々だったのでほとんど家族といっしょに食事をした記憶がありません。)

今ごろの季節なら、わが家の献立といえばワラビの炊いたのが大きななべごとちゃぶ台の真ん中にありました。季節によってはなべの中身が大根と里芋の煮物の場合もあります。このなべが空になるまで毎食これでもかと出てきます。

断っておきますが、私は当時の母親を責めるつもりは全くありません。母親には2種も3種ものおかずを作る時間的余裕などなかったのです。買い物かごをさげて夕ご飯の食材を買いに出かけることなど当時の農家の嫁にはあり得ないことでした。なぜなら、農家には食べられる物がいくらでもあるからです。



さて、5年生のある日、給食の献立に今まで出たことのないものが出ました。食缶の中をのぞいてみると真っ赤でどろどろしています。配られたものを先割れスプーンでおそるおそる味わってみました。少し酸味があるけれど家で毎食食べるワラビと比べれば数段おいしい料理でした。(あとで考えればトマトシチューだったのではないかと…)

ところが、教室のあちこちから意外な言葉が聞こえてきました。「これまずい」「これ食えんわ」「先生、残してもいいけ」などなど

先生は「給食は残しちゃいかん。全部食べなさい。」クラスはざわめきながらも何とか食べきろうと努力しているようでした。私もクラスの一員ですから一応がまんのふりをしながら内心「けっこううまいけどな」と思いながら食べていました。

すると、担任の先生が思いもよらない言葉を発したのです。「こりゃあ先生も食えんわ！」よほどがまんしたのでしょう。顔を真っ赤にして食缶へ残りの赤い食材を捨てました。あとは子どもたちがそれに続くのは目に見えています。さあ私は困りました。しかし、残念ながら「おれはうまいよ」と言って残りを食べきる勇気がありませんでした。自分もさも今までがまんしたかのようにクラスの友だちといっしょに捨てたのです。

自分がおいしいと思うものをなぜ捨てたか…その後何回も自問しました。その度に思い起こすのは母親が作ったなべいっぱいのワラビの煮物です。そして逆にこう問い返されます、『おまえはあのなべを母親の前で捨てられるか!』

私は教師になって36年間、ずっと給食のお世話になってきました。しかし、給食が「まずい」と言ったことは一度もありません。